大学生における自傷行為のイメージに関する研究

—自傷イメージは行為にどう影響するか—

○中村綾乃¹・大坪治彦²

(¹鹿児島大学大学院教育学研究科・²鹿児島大学教育学部)

キーワード：大学生 自傷行為 自傷イメージ

A study of the self-injured image in undergraduates –Effect on their recognition of self-injured behavior–

Ayano Nakamura¹ Haruhiko Ohtsubo²

(¹Graduate School of Education, Kagoshima University, ² Faculty of Education, Kagoshima University)

Key words: undergraduate, self-injured behavior, self-injured image

目 的

自傷行為は 10・20 代の若者に数多く見られ、その数は増加傾向にあるとされている。また、最近では小説やマンガなどで自傷行為を扱った描写が取り入れられていることやいわゆる自傷系サイトが web 上に存在することなどからも、自傷行為に対する受け取り方、どのような行為を自傷行為と認知しているかということが多様化していることが考えられる。

本研究では、日常生活の中で行っている自傷あるいは危険を伴う行為[頻度]に対して、その行為をどれだけ自傷行為と認知しているかという[行為認知]がどのような影響を与えているとともに、自傷回数の増加[自傷回数]がそれぞれに対し、影響を与えている『(性別の違い・自傷回数の増加→) 日常生活の中での行為をどれだけ自傷行為と認知しているか[行為認知]→日常生活の中での行為[頻度] (→自傷回数の増加)』というモデルの検討を行った。

方 法

【調査対象】大学生 244 名 (男性 104 名, 女性 140 名)

【調査内容】

- ① 日常における自傷的あるいは危険を伴う行為[頻度]に関する項目 76 項目を 5 件法で回答を求めた。
- ② 上記の 76 項目に対して自傷行為だと認知するか[行為認知]を 4 件法で回答を求めた。
- ③ 自分自身の自傷の経験の有無に関する項目 1 項目を 5 件法で回答を求めた。

結 果

目的で示したモデルの検討をするために、頻度と行為認知の各因子と自傷回数、性別を観測変数とし、頻度と行為認知を潜在変数として、共分散構造分析を行った。結果は Fig.1 に示す。モデルの適合度指数は、GFI=.880, AGFI=.833, CFI=.837, RMSEA=.088 であった。共分散構造分析を行った結果、頻度から自傷回数に、性別から行為認知に対するパ

スは有意である標準化推定値が得られた。しかし、自傷回数から行為認知に、行為認知から頻度に対するパスは有意でなかった。頻度から自傷回数、性別から行為認知へのパス係数は正の影響を示した。また、頻度から各因子ではファッション的行為を除いて有意なパスが得られた。次に、行為認知ではすべての因子に対して有意なパスが得られ、刺す行為と身体への暴力、身体への特定部位への行為、切る行為の各行為間に、また身体への暴力と切る行為の間に正の相関が、ダイエット的行為と過度な食行動や遊び行動の間に負の相関が示された。

考 察

行為認知から自分自身の自傷頻度に対し有意なパスが見られなかったことは、自傷に対するイメージを想起する際に、自分自身のことではなく、友人やメディアから得られた情報などの第 3 者的な視点の影響から、自分が日常生活の中で行っていることに結びつかなかったのではないかと考えられる。このことは、行為認知から自傷回数に対するパスがみられなかったことからもうかがわれる。

行為認知の各因子で相互に正の相関がみられる 4 つの因子は、他の 3 つの因子に比べ、身体に対して直接的に暴力を与えているといえることができる。ファッション的な行為については、相関がみられる因子がないため、自傷という観点では、その他の行為とは違う認知のされ方をしていると考えられる。また、負の相関がみられる 2 つの因子については、ダイエット的な行為の項目が「下剤を飲む」などから構成されていることから、自分の身体の中から外にだす行為として捉えることができる。一方、過度な食行動や遊び行動の項目は、「自分の身体の中に取り入れる行為とみることができる。これらは表と裏のような関係にあるといえ、どちらかを自傷行為と捉えると、別な行為について自傷行為と認知されにくくなってしまふといえる。

Fig.1 自傷行為の頻度とどれだけ自傷行為と認知されるか[行為認知]の構造図